

2003 年度  
GNC 活動報告

平成 16 年 3 月



## GNC現地調査概要報告(2003年9月)

実施日程:2003年9月13日~9月20日

参加者:GNCスタッフ :宮木いっぺい、矢野明子

GNC モンゴル責任者:Tsogetsaikhan (ツォゴ)

準スタッフ:森泉恵子(大学生)

同行通訳:Nasanbulig(ナスカ 在日モンゴル留学生会代表)

オブザーバー: 若宮 武(現地合流、大学生)



後列: ツォゴ、ナスカ、宮木、若宮 前列:森泉、矢野

### <苗木畑の現状>9月14日~9月17日農場滞在

昨年、待望の GNC 苗木畑(1ha)を持つことができ、今年は第2井戸も設置しました。5月の植林ツアーでは日モ両国の若者たちの手で苗木栽培をスタートする予定でしたが、残念ながら SARS の影響で日本からの緑援隊の参加が中止となってしまいました。そのため、今年はモンゴルの人々だけの手で、マツの苗(2年もの)5000本を植樹してもらいました。来春は現地若者のほかに日本からのツアー参加者、第18学校の生徒達の課外授業も加わり、新たな畑の周囲にウリヤス(ポプラ)の防風林を植樹、苗木の挿し木栽培などを実施する予定です。また、マツの育苗としては種からの栽培も試みます。



活着したマツの苗 (2002年9月撮影)  
およそ50パーセントの活着、今後の課題は越冬です。



枯れたマツの苗(2002年9月)  
植樹の際の踏み固めの強弱が微妙に影響しているようです。



信州大学山寺先生の指導の下  
試験的な苗木栽培も同時に実施しています。

## ＜エコアジア大学訪問—学生たちとの意見交換会＞ 9月15日

毎年、農場で共に防風林を植樹してきたモンゴルの学生たちの多くが所属するエコアジア大学を訪問し、エルデントゥグス学長と面会、今後可能な協力事業についてより具体的に話し合いました。さらに、環境アセスメント、環境政策、法制度を専攻している学生たちおよそ40名と彼らの専門を生かして連携していける環境保全事業について活発に意見交換をすることができました。また、これからも、モデル農場での緑援隊体験ツアーには多くの学生たちが積極的に参加していってくれることを約束しました。



エルデントゥグス エコアジア大学学長



GNCのモンゴルでのおもな活動紹介



熱心に耳を【傾ける学生たち

## ＜セレンゲ県森林伐採地、放置農地の現状視察&森林・動物センター訪問＞ 9月16日

農場での防風林植樹、育苗に続き、来年度から、セレンゲ県の森林伐採、火災跡地トデンナルスで、森林再生のための植林事業に参加することになりました。来年度は10ヘクタール 約1万本のマツの植樹を予定しています。植樹後の水遣り、監視などの管理に関しては、現地の森林・動物センターと契約し、彼らが責任をもっておこなってくれます。昨年の実績としては、76パーセントの活着率とのことでした。

また、途中に広がる放置された農地の復元に関しても、地元の人々と共に今後、専門家を交え積極的に取り組んでいくことを話し合いました。



放置された農地に生い茂る雑草  
(ヨモギの一種、牧草には不適切)



森林・動物センターのジャムスラン氏より  
来年よりスタートする森林再生のための  
マツの植樹についてお話を伺いました。  
持続可能な農業の実践を目指す  
TC AGRO株式会社社長ツメンデムベレル氏も  
同行されました。(写真手前右)



来年度より植樹を行う予定地 トゲンナルス  
以前は豊かな森林地帯だったそうです。



没収された不法に伐採された丸太の山  
最近のウランバートルでの建築ラッシュに伴い  
違法な森林伐採 がかなり増加しているようです。

### <NGO「モンゴル持続可能な農業協会」訪問>9月17日

環境保全型の農業を持続させることを目指し、よりシンプルで使いやすくしかも多大な電力消費を考慮した農業サポート商品、たとえば、無駄な水利用を抑え、土地へのダメージも軽減できる灌漑用特殊製品や、人糞を利用した肥沃な土作りが可能なトイレ、ゲル地区での非衛生的なトイレ事情を解決するためのあらたな製品なども紹介してもらいました。今後、モデル農場でもこれらの商品をうまく活用していくとよいと思います。



NGO「モンゴル持続可能な農業協会」代表のドラム  
ツォー氏



少しずつ水がにじみ出てくるように開発された特殊  
な灌漑用紙製品



人糞を土と混合し無臭の肥沃な土に変えるトイレセット



様々な研究開発に取り組んでいる  
カナダからの研究者 クリエ氏

### <農牧副大臣&農牧大学学長訪問>9月17日

農牧副大臣 ガンダンシャタル氏、国立農牧大学学長 アルタンスフ氏を訪問し、GNCのモンゴルでの活動の経緯を説明し、両氏からは国家として、大学としての今後の農牧業に関する基本方針、新事業計画などをうかがいました。農牧省としては今後特に灌漑施設を充実させていく計画があるようです。また、農牧大学の今後の方針としては、単なる研究だけに留まらず、実践を通して、学生たちに研究成果を確実に実現していくことの重要性、農牧業を実際に営んでいる人々とうまく連携していくことに大きな意味があることを学べる場をより充実させていきたいとのこと。GNCとしては放置農地の調査と復元、モンゴルに適した組合の研究などの点で協力してゆくことを約束しました。



農牧副大臣 ガンダンシャタル氏（左手前）



国立農牧大学学長 アルタンスフ氏(右)

### <第18学校訪問>9月18日

来春、実施予定の日本語選択クラスの生徒たちによるモデル農場での課外授業をどうすすめるかについて、エンフバット校長と打合せしました。



エンフバット校長



2002年、2003年敷地内に記念植樹したポプラ ほぼ活着していました。

### ＜モンゴル国立大学エコロジー教育センター訪問＞9月18日

当センター訪問は4回目となります。センター長のバザルドルジ先生他、教職員4名と共に大学敷地内にモンゴル原生の全植物を収集、展示した植物博物館の開設に向け、互いに協力し合って、進めていくことを確認しました。また、学生、研究者を交えたセミナーも今後、定期的に行なっていくことを約束しました。



今後の連携事業について意見交換



敷地内にモンゴル国に原生する全植物を収集した植物園の造成構想を語る

バザルドルジ先生(写真左から3人目)

### ＜ハンオール地区区役所訪問＞9月18日

ハンオール地区(GNC 苗木畑がある)区役所を訪問し、ハンオール地区における新たな環境保全の地域モデル事業(ミニパーク造成、街路樹植樹など)について担当の方達にお話を伺いました。



写真中央左から エルデヴスレン氏、オユンバートル氏、パーサーン氏



### ＜モンゴル日本センター、在モンゴル日本大使館訪問＞ 9月19日

昨年に引き続き当センターを訪問し、センター長の四釜氏よりモンゴルの現状、および日本人の対モンゴル意識の抱える様々な問題点を伺うことができました。在モンゴル日本大使館への訪問は今回初めてです。一等書記官の林氏と面談し、GNCのモンゴルでの活動経緯などをお話しました。

### ＜交流会＞ 9月18日 ビシレルトホテルにて

今回でモンゴル訪問も10回を越えました。その間、様々な形で、GNCを支えてくださった方達との年に一度の再会がとても楽しみです。今年も多くの方たちが集まってくれました。

皆様、お世話になりました。ありがとうございます。来年もまた、会いましょう！



第4回NGO合同研究&活動報告会

日時:2003 年 12 月 13 日(土) 13:30~16:30

会場:東京国際交流館ミーティングルーム

プログラム

(1) 参加団体紹介(自己紹介)

(2) 各団体報告&質疑応答

●地球緑化クラブ

発表者:(代表)原鋭次郎さん

「牧民が始めだした緑化草方格のこと」

●GNC

発表者:(代表)宮木いっぺいさん

「モンゴル国での実践—2003 年活動報告」

●内モンゴル沙漠化防止植林の会

発表者:(代表)セルゲレンさん

「2003 年度 学校自立支援環境教育事業報告」

(3) 意見交換

終了後 懇親会

主催:内モンゴル沙漠化防止植林の会・沙漠緑化団体 地球緑化クラブ・ GNC(Global Network for Coexistence)



沙漠緑化団体 地球緑化クラブ  
代表:原 鋭次郎氏



内モンゴル沙漠化防止植林の会  
代表 B. セルゲレン氏





GNC(Global Network for Coexistence)

代表 宮木いっぺい氏



各団体活動報告後の 意見交換会では活発なやりとりがありました。

参加団体

**沙漠緑化団体 地球緑化クラブ**

代表:原 鋭次郎

E-mail: [sabaku@ryokukaclub.com](mailto:sabaku@ryokukaclub.com) <http://www.ryokukaclub.com/>

[活動主旨]

日本・中国だけでなく世界に発信する地球緑化活動を継続していく為に、誰でもいつでも参加できるクラブ活動のような存在として、現地で最良な砂漠 緑化の方法を常に模索し地道な活動を行なっていくこと。

[運営方針]

- ①現場主義(緑化活動を現地住民と共に行なうこと)で、お互いの力と知恵を合わせて砂漠緑化に全力を注ぐ。
- ②助成金・会員費等に頼り過ぎない運営を目指す。
- ③現地の人々が無意識に自ら緑化活動を行なえる状態(日本人が庭に木や花を植えるような感覚)にまですることを、それぞれの活動地での最終目標とする

**内モンゴル沙漠化防止植林の会**

代表 B. セルゲレン

〒112-0011 文京区千石 2-43-8 ロイヤルクレスト 101 TEL:03-5520-6918

代表メール [shokurin@md.neweb.ne.jp](mailto:shokurin@md.neweb.ne.jp) <http://www2.neweb.ne.jp/wd/sergelen/desert.html>

内モンゴル沙漠化防止植林の会は中国内モンゴル・ホルチン沙漠において、牧草地・農地の沙漠化防止を目的とした活動に取り組んでいます。実施に当たっては、現地住民の環境意識の昂揚と生活文化の相互理解を深めるため、日本側の 植林協力隊と地元牧民や学生たちの交流にも重点を置いた活動を行っています。バ

ツフル・ソムでの活動の他、学校自立支援経済林プロジェクトとして 昨年より開始したゴルバンファ・ソムに加え、来年度より新たに2つの中学校でも活動を開始します。また、高等教育への進学支援として奈曼旗蒙古族中学への 内モンゴル育英緑化基金も運営しています。

### GNC(Global Network for Coexistence)

代表 宮木いっぺい

〒176-0004 東京都練馬区小竹町 2-16-12-103 TEL&FAX 03-3958-0948

E-mail: [kyouzongnc@gmail.com](mailto:kyouzongnc@gmail.com) <http://kyouzongnc.com/>

私たちは、3つの共存(coexistence)①人と人との共存、②自然と人との共存、③過去、現在、未来の共存を目指し、信頼のネットワーク(network)を広げながら、動き続けていきたいと考えています。現在、モデル農場作り、草原復元、植林、各種学校訪問、環境教育啓蒙ポスター作り(地元大学生を中心に)、交流会、セミナー開催など様々な活動を通して、モンゴル国の多くの人々と共に、持続可能な地域作り、国作りをすすめる活動をしています。毎年、春に植林体験ツアーを実施し、秋には調査出張を行っています。



会終了後は ラムしゃぶのお店で食べて飲んで楽しいひと時を過ごしました。

場所:モンゴル大使館 2004年2月28日(土)

モンゴル国での実践—GNCの活動

＜新しい関係、そして共存への第一歩をモンゴルから＞



ウラム集会は、モンゴルの将来について毎回モンゴルの若者が熱い議論をたたかわす場です。そのような場で話をする機会を与えられたことがとてもうれしかったですし、いつも以上に力がはいりました。

ただそういう場合、私は力みすぎて話が空回りする傾向があります(繰り返しが多くなるようです。反省!)。しかも、土曜日の午後のもっとも眠くなる時間。どうなることかと多少心配していたのですが、参加した学生、そして大使館の方は2時間にわたる私の話を真正面から受けとめ(何よりこちらの一番伝えたいことがストレートに伝わっていたことに感激しました)、そのうえでとても前向きな意見を述べてくれました。

そこから熱意、希望、新しいアイデア等、多くのすばらしいものを受け取りました。

このような出会いは活動への何よりの活力源になります。

ここで出会ったモンゴルの若者たちと、これからもいろいろな話をし続けてゆきたいと思います。きっとそこから、とても良い感じのもの(曖昧な表現ですが)が生まれるだろうということを、今強く感じています。

## GNC車力村視察ツアー概要報告(2004年3月)

実施日程:2004年3月24日~3月25日

参加者:モンゴル留学生:

Nasanbulig(Tokyo) ナスカ 一橋大学大学院 在日モンゴル国留学生の会代表

Battur(Hokkaido) バトゥール 北海道大学大学院

Baasandash (Tokyo) バアサンダッシュ 東京工業大学大学院

Zorig(Tokyo) ゴリグ 一橋大学大学院

GNC スタッフ :宮木いっぺい、矢野明子

GNCの宮木、矢野にとっては1998年以来、6年ぶりの車力村訪問でした。この村の厳しい自然環境、(寒冷地、強風による砂の移動、やせた土壌など)を乗り越えて、遠く江戸時代より試行錯誤を重ね、農業を充実させるためにたゆまぬ努力を続けている姿勢は、過酷な自然と闘わなければならないモンゴル国での農業にとって、見習うべき多くの点があります。特に、この村の生命線といえる何重にも植樹された見事なクロマツの防風林帯を実際に目にすることは、留学生たちにとって、大きな説得力をもったように思います。

また、都会だけではなく、地方に住む日本人の生活に直接触れることは、彼らに日本をより広く深く理解してもらおう上でも大いに役立つことでしょう。

### 3月24日

#### <顔合わせ> 車力村役場



(左写真)写真右 車力村の方々

(右写真)手前より成田さん、鎌田さん、台丸谷さん(GNC 理事)、松橋さん、小林さん

車力村成田村長(前列中央)と共に左から ナスカさん、バアサンダッシュさん、ゴリグさん、宮木代表、バトゥールさん、矢野

#### <クロマツの保安防風林見学>

車力村のまさに生命線であるクロマツの防風林帯は海側より、第1線から3線まで整然と植樹されており、今もその保全是休むことなく行なわれています。また、村中のあらゆる耕地も密生した防風林で囲まれていました。砂の移動を止め、日本海から吹く強風より田畑を守るためになくてはならないものです。

### 車力村全域



日本海(写真上方)からの強風を防ぐクロマツの防風林帯(第1線と呼ばれている)

それぞれの耕地(写真上白っぽい部分)の周りを囲む防風林



(左写真)第1線防風林、犠牲林と呼ばれ、日本海からの強風より村全体を守っている。

(右写真)約5ヘクタールの耕地すべてがクロマツの防風林で囲まれている。

### <マツの苗木畑見学>

車力村にとって重要な防風林帯を維持するために、常に、その苗木栽培は欠かせない作業です。



(左写真)マツの苗木が大切に栽培されています

(中央写真)マツポックリから種を取り出す時期、方法などのお話を伺いました。(工藤 不二夫さん)

(右写真)熱心に説明を聞く留学生

### <村民のための様々な農業システム>



(左写真)高価な農業機械を村で所有、管理し、オペレーターつきで 常時貸し出すことにより、各農家の負担を軽減している。(写真は農業用機械格納庫)

(中央写真)保存、出荷に関して年間を通じて村で、集中して管理している。(写真は集出荷(予冷)施設)

(右写真)この時期は山芋の集荷作業が おこなわれていた。

3月25日

### <辻村 章氏(樹木医、森林振興担当) 訪問>青森県北地方農林水産事務所

樹木医でもあり、現在青森県の林業振興を担当されている辻村氏に、いかに森林を守っていくことが重要か、植林の大切さ、また、苗木栽培に際してのキー・ポイントなど、GNCにとって今後うまくいかしていきたい貴重なお話をいろいろ伺うことができました。



(左写真)辻村氏(樹木医、青森県北地方農林水産事務所、森林振興課)、月永さん(GNC 理事)

(右写真)「歴史的にも森林を失うと国は滅びる」辻村氏の重いメッセージを真剣に受け止める留学生たち

### <親睦会>

車力温泉に浸かった後は、津軽地方の美味しい郷土料理や地酒をご馳走になり、留学生たちはモンゴルの歌を披露したり、とても楽しいひと時をすごしました。



## 参加留学生の感想

### バトバヤ ナサンブリッグ(ナスカ)

在日モンゴル国留学生の会代表  
一橋大学大学院 社会学研究科



GNCとは1999年から色々と付き合いをさせて頂いております。GNCがモンゴルで進めている防風林の植林活動に参加したり、GNCがモンゴルの様々な人々と会って話をする時に通訳をしたりしました。色々な話の中でGNCがよく使っていたのは「モデル農場」と言う表現でした。

しかし、正直に言いますとそれが本当は何なのかよく分かっていませんでした。また、GNCの現地スタッフでもあるツォゴさんに何度か会って話をさせて頂いた時、彼は車力村で真の農業とは何か、農業の恩恵とは何かを勉強することが出来たと話していました。このようにツォゴさんにとっては車力村での研修は人生の大きな転換点でもあった訳です。従って、私としては、GNCの活動とツォゴさんの今の人生の原点でもある車力村を実際に訪れて、自分の目で見てみたい

と言う気持ちは強かった訳です。

そして、先日3月24、5日に青森県の車力村を見学する機会に恵まれました。自然の厳しい状況の中で農業を営み闘ってきた人々の姿がそこにありました。一線、二線、三線と遥か江戸時代から防風林を作り、それが今となって立派な森林と化していました。本当に人が植えたのかと目を疑う程のものでした。地元の人々の話によるとこの森林があったからこそ生活が成り立ち、生き延びて来たと言います。「木が無くなれば国が減る、森林は簡単には作れない、長い辛抱強い努力が必要である、森林があれば環境・気候も変わる」などと役場の人が言っていた言葉が一つ一つ非常に印象深いものでした。

モンゴルではたくさんの木が伐採され、自然環境が益々悪化しています。砂漠化、大気汚染、水源枯渇などは深刻な社会問題となっています。まさに車力村の人々の様に長期的なヴィジョンを持ち、辛抱強く努力をすることが今のモンゴル人に求められていると言えましょう。努力には具体的な目標と強い信念が必要であります。たくさんのモンゴル人が特に若い政治家が青森の車力村を訪れて実際に見て共通の信念と目標を持って欲しいと願うばかりです。実際に見ることによってこれから何をすべきかもっとはっきりすることは言うまでもありません

私自身も車力村の人々の長年の努力と蓄積を出来るだけ多くのモンゴル人に伝えてゆきたいと思っています。青森県車力村に行く機会に恵まれてとてもよかったです。木を植えることの大切さと重要性を身を持って実感することが出来ました。

このような機会を与えて下さったGNCのいっぺいさんと矢野さん、車力村の皆さん、特に台丸谷さん、松橋さんと奥様たち、成田博さん、成田悦雄さんに心からお礼申し上げます。

GNCと車力村の今後の益々のご発展をお祈り致します。

### バトウール ソイルカム

北海道大学大学院 農業経済学

私はモンゴルからの留学生3人と一緒にGNC(Global Network for Coexistence)というNPOの協力を頂いて青森県の車力村に農業見学のために平成16年3月24日から二日間訪問しました。



このイベントに参加させて頂いて農業の勉強だけではなくGNCのスローガンである「人と人との共存」と「自然と人との共存」を改めて感じました。車力村の特徴である防風林のことを勉強し、それをモンゴルで普及させることは今回の目的の一つでした。GNCと車力村の人々のモンゴルのための様々な話を聞いた時、モンゴル人として私は何をすべきかと自然に考えたことも多かった。

GNCを初め、車力村で様々なことを親切に教えてくれた皆様に心から感謝しています。楽しい二日間でした。

### 車力村の概要

まず、車力村勢要覧より、村の概要を紹介する。車力村は本州の最北端に位置し、平成7年の人口は6107人、面積は62km<sup>2</sup>である。そのうち水田が15.2km<sup>2</sup>、畑が8.6km<sup>2</sup>、山林が3.25km<sup>2</sup>となっている。また、高齢化が進んで65歳以上の人口が17.9%をしめている。車力村は日本海側の海岸に位置するため風が強く、飛んで来る砂も多い。車力村の基幹産業である農作業にとって大きな障害である。そのため、江戸時代から始められた防風林の植林が現在も国費で行われている。

車力村では、平成2年からモンゴルとの交流が始まり、今まではモンゴルからのべ62人の農業研修生を受け入れてきた。平成11年には首都ウランバートル近郊に農業研修生出身者2名が土地を確保し農業に取り組んでいる。

### 経済的概要(統計から見た)

15歳以上の就業者3041人の62%が男性が占めるので、女性は家で子供の教育と家事をしていることが多いと考えられる。産業別にみれば、第一次産業である農業等が37%、第二次産業である製造業と建設業等が28%、第三次産業である公務が12%、サービス業が11%、卸売業・小売業が9%を占めている。産業別就業人口の推移を見れば、昭和60年に車力村の就業者の49.2%が農業で働いていたが平成7年には37.4%に減っている。一方、第3次産業である、公務、サービス、卸売業・小売業等で働く就業者の割合が29.9%から35.1%に増加したが、その10年間で商店で働く人の実数が342人から235人に大きく減った。そのうえ平成3年から9年にかけて年間商品販売額が35.8億円から28.2億円に減少している。平成9年のデータにもとづき商店を産業分類別にみると、91商店のうち飲食料点小売業の49店、自動車・自転車小売が5店ある。そのうえ小売の90店もあることは、生活水準が低いモンゴルでは考えられない。

農業に関しては、平成7年のデータによれば、807農家のうち94件が専業農家である。経営耕地規模をみれば3ha以上の農家は249件、1から3haは333件、1ha未満の農家は225件である。村の飼養家畜頭数は肉用牛996頭、豚2196頭である。

林業に関しては、365戸全てが5ha未満の保有山林規模である。車力村では海面、内水面漁業もありそこで39人が働いている。産業別純生産(平成8年度)の中では第三次産業が60.5%、第二次産業22.7%、第一次産業16.8%をしめる。第一次産業はほとんど農業である。

平成14年の財政については、歳入総額4101百万の14.3%が自主財源である。

### おわりに

車力村の純生産に占める農業の生産額の割合がわずかに16.7%であるがそれをベースとした第二次、三次産業による生産が多いと考えられる。そのため、WTO等の影響で政府から農業への支援の減少がこのまま続けば、農家の販売力が落ち、現在村の総生産に重要な位置を占めている小売店とサービス業にも影響を及ぼす可能性があると考えられる。

平成16年度の村の財政が1割減少したのは、政府からの支援に大きく依存する本村にとっては厳しい現実問題である。



## アリマー・ゾリグ(ソリゴ)

一橋大学大学院 経済学研究科



車力村ツアーの感想。

車力村ツアーに参加した理由として、二つほどありました。ひとつは、農業を営みたいという叔父さんに助言できるような経験を少しでも蓄えたい、叔父さんがやりたいといっている農業というものは本当に儲かるビジネスになれるものなのか確かめたいという気持ちでした。もうひとつは、都会の忙しい生活から離れ、休暇としてこのツアーに参加したいという理由でした。

参加後の感想として、非常に勉強になる、楽しいツアーになってとてもよかったですと思っています。まず、今まで知らなかった車力村とモンゴルの間での交流や、車力村の皆様のご援助、応援の元でモンゴルで成功している農業の例について聞くことができたことが非常にためになることでした。また個人的に、厳しい中でも人間的なよさを保ちながら生活している農民たちに非常に魅力を感じ、忙しい都会生活をすこしでも忘れられた、「懐かしい」ような体験ができて非常にありがたく思っています。これからもこのようなツアーが行われることは、車力村と、将来モンゴルにて働く若者たちとの交流を深め、またモンゴル人の中の農業や植林の大切さ、環境の大切さを肌で感じるいい機会にもなると思います。

## チョイジル パーサンダッシュ(ボジ)

東京工業大学大学院、理工学研究科、  
機械物理工学専攻 矢部・大島研究室

車力村ツアーについて。ちょうど卒業発表が終わって気楽になっていたところ、GNCの新たな計画となる青森県・車力村へのツアーに参加できてとても嬉しかったです。弟も今年からモンゴルで農業をやると聞いていたところで「日本の農業ってどんな感じ？」という興味があってちょうど良いタイミングでした。

厳しい自然状態を人間に優しい地域に変えるため色々チャレンジし、人間関係の大切さを昔から経験して来た車力村の人々の心は広くて暖かかった。人工的な防風林を見て、専門家のお話で「草原や砂漠に木を育つと自然環境が変わる」と聞いてモンゴルでの乾燥した気候を我々の手で変えられる事に自信が出来ました。車力村の皆様は自分の地域だけではなくモンゴルの草原を生かすためにも活動している事を聞いて私も出来るだけ役に立ちたいと思いました。

